

ロレンス随想(Ⅲ)

『恋する女たち』——その孤独なる内より——

高城 檣 秀

(一)

『恋する女たち』(*Women in Love*)が出版されたのは一九二〇年十一月のことであった。アメリカでの私家版である。この小説が書きはじめられたのは、一九一二年末の頃で、初めの計画では『姉妹』(*The Sisters*)という長編であったが、その前半が『結婚の指輪』と題し、後に妻フリーダのアドヴァイスで『虹』(*The Rainbow*)と改められた。そして『姉妹』は『虹』と『恋する女たち』に分れて、二つの長篇となる。この二作はロレンス文学の系譜のなか

で、思想的にも、作品的にも最も白熱した代表作と一般に認められている。僕もまたそう思っている。『虹』と『恋する女たち』の執筆の事情はこうしたものであったので、おのずから正篇、続篇の形をとるが(事実『虹』の主人公アーシュラは『恋する女たち』の主要人物のアーシュラに自然に成長している)、しかし、この兩作品は完全に独立した別個の作品と見做す方が妥当である。

因みに、『恋する女たち』の原稿は一九一六年十一月に完成して、出版がかなり遅れているのは、『虹』がまことにつまらない理由で発禁になったので、出版社が見つけられなかったためである。

その当時ロレンスはどのような生活をしていたかという
と、ノティンガム大学の言語学者アーネスト・ウィークリ
ーの妻フリーダと駆落ちし、ドイツへ渡り、イタリア北部
のガルダ湖畔に移り、『息子と恋人』(Sons and Lovers)を書
き上げ、一九一三年に出版している。この自叙伝的小説に
よって、ロレンスは英国文壇に新進作家としての地位を確
立した。そして今日に至るまで、ロレンスの小説中唯一の
青春文学の傑作として評価されている。『虹』と『恋する
女たち』の原稿ははやくもその頃から書きはじめられてい
る。

だがロレンスの生活は順調ではなかった。フリーダの離
婚問題がごたつき、彼女とウィークリーとのあいだに離婚
が成立したのは一四年であった。しかもフリーダは残して
きた子供が忘れられず、苛立ち、ロレンスに当る。また著
述活動では『虹』が「わいせつ」という理由で発禁にな
る。そのため文筆に生活を預けていた彼は金銭上の問題に
苦しむ。そのうえ第一次大戦が勃発し、彼は精神的、生活
的に悩まされる。ロレンスは創造的芸術家独特の予見を持
っていて、この大戦に陰に陽にあらわれる文明の崩壊とそ
の危機を心奥で感じ、激しく批判する。彼はある種の深い

絶望におちいつている。たまたま一九一五年の末、コーン
ウォルに住んでいた頃、たぶん妻フリーダがドイツ人であ
ったためだろうが、敵潜水艦と連絡しているという噂をた
てられ、スパイの嫌疑をかけられる。また、兵役検査は結
核のために不合格であったが、人間らしい扱いを受けな
かった。等々の理由でロレンスの当時の生活は決して愉快な
ものでなかった。

しかし反面、彼はいままでの炭坑夫の息子の生活から脱
して、有望な新進作家として生活圏をひろげ、英国の知識
人の集団に接近した。

ロレンスは国会議員フィリップ・モレルとその夫人オト
リーンと親交を結ぶ。この夫妻の邸宅はガーショントン・マ
ナーと呼ばれていたが、ロレンスは彼の夢であった新しい
村「ラナニム」(Rananim)をここに築こうと考える。この
邸宅には兵役拒否者等の平和論者が集まっていたが、また
オトリーン夫人は文学、芸術のパトロンのとして自認してい
たので、ここに当時の文学者、知識人が多数来合させた。
リトン・ストレーチー、オルダス・ハックスレイ、ヘンリ
ー・ジェームズ、ジョーゼフ・コンラッド、そしてパート
ランド・ラッセル等がいる。ロレンスが当時特に親しくし

ていたのは、A・ハックスリイ、ラッセル、そしてJ・M・マリー、キャサリン・マンズフィールド、ガーネット父子たちである。

人々は私に尋ねる。時代の波に乗り成功者となるのは、非常に困難なことであつたかと。そして私が時代の波に乗り成功者と呼ばれることが許されるならば、それは少しも困難ではなかつたということ認めねばならない。私は決して屋根裏に飢えもしなかつたし、郵便配達人が編集者または出版者からの返事を持って来るのを死ぬ思いで待ちもしなかつたし、傑作を書くうと血や汗を流してもがいたこともなければ、また一朝眼覚めて自分が有名になつて⁽¹⁾いるのを見出したわけでもなかつた。〔自伝的スケッチ〕

こうしてロレンスは英国の上流社会、知的社会に接触するようになった。また妻方の方の人間関係を見ても、同じくいままで知るよしもなかつた、ヨーロッパの上流社会、知的社会の一隅に接する機会を得た。フリーダの父はドイツ貴族であり、姉のエルゼは先駆的な自由な女性で、マックス・ウェーバーのもとで経済学を専攻し、学位を授与されているが、エルゼはウェーバー兄弟と親しい関係があ

り、マックスの弟と共に暮らしている。ロレンスはこの義姉に『虹』を献呈している。また妻フリーダの親友にフロイドの弟子がいるが、ロレンスはフロイドを読むまえに、妻フリーダからフロイドについての知識を得ている。

このようにロレンスは、英国のみならずヨーロッパの上流社会や知的社会を知るようになったが、しかし彼は彼らしく、一時は熱狂的に親しくなることもあつたが、概して親しい局外者として交わっている。ラッセルはあるときロレンスの思い出を語っている。「ロレンスは世界をよくしようという気がない。ただ世界がどんなに悲惨であるかを雄弁に独白しているにすぎないのだ」と。ラッセルが話す。現代世界を批判する。ロレンスも共鳴する。ラッセルが新しい社会へのアプローチを打ち出す。ロレンスは黙して苦々しげに首を振る。ロレンスには現代文明の崩壊していく行先が分つているように思えたのだ。手をひろげて待てと言つても無駄だ。だから新しい社会をいま云々と語つても言葉の遊びにすぎない。崩壊するものは行くつとこるまで行かせればよい。それが今日語ることなのだ、彼は考へていた。ロレンスが彼等友人達の親しい局外者でいたのは、あるいは彼の生れ育ちからくるコンプレックスに

よるところもあつたかも知れないが、主として現代文明に對する彼の諦觀に似た絶望感の故であつたようだ。

さて、話を『恋する女たち』に戻せば、『虹』との共通テーマは、一言で言えば、生への畏敬である。生の全一性を直感し高揚することである。そしてその生はあくまで個人の生であり、個人の生をよそにして、関心を寄せ敬意を表すべき生もなければ、仕えるべき生などはない、という認識である。⁽³⁾しかしながら『虹』と『恋する女たち』とは、たしかに前者の發展線上に後者があるが、その認識の芸術的表現においては非常に違っている。であるから、この二作品は独立した別個の作品として見做す方が妥当であると、僕は考えている。

その相違は、その外面的な方向から見れば、大体次の五点ぐらいになるだろう。その一は、両作品中の環境である。『虹』の舞台は英国中部地方のマーシュ農園で、この住人の物語である。そして主人公はブラングウェン家のアーシュラで、この物語の半分以上の頁数を占めていて、彼女の子供時代から少女時代、そして小学校の教師、大学生、アントン・スタレベンスキーとの恋愛と破局へと進む。彼女は新しい可能性を探求する新しい女であるが、や

はりマーシュ農園から離れない。『恋する女たち』では、もはや「ダービシアとノティンガムシアとの州境、榛の木⁽⁴⁾の林のあいだを、眠ったようにエレウォッシュ川がうねうねと曲り流れる」あたりにある農園は、出るには出るが、完全に背景に押しやられている。この小説の舞台は中部イングランドとロンドンとそしてチロル、アルプスの山脈である。しかも中部イングランドといつても貴族の館や産業王の邸宅（したがって炭坑地帯も出てくるわけだが）、そしてそこに集まる知識人の群れ。ロンドンではピカデリ・サーカスに住む、若く貧しいが、ボヘミアンの生活を送っている芸術家やモデル達。アルプスの山宿で偶然に出会うドイツ人の大学教授の親と娘、彫刻家等である。『虹』の環境が田園風⁽⁵⁾俗であるなら、『恋する女たち』のそれは、ロレンスがガーシントン・マナー等で知った、より高級で、洗練された知的世界である。

第二の相違はニヴン (Alstair Niven) が言うように (デームイアン・グラントも同じ言葉で同じ趣旨のことを言っているが)、⁽⁵⁾『虹』は通時的 (diachronic) で、時間の経過をとまなうが、『恋する女たち』は共時的 (synchronic) で物語は比較的短い期間に起り、まとめられている。『虹』はマイシ

ユ農園三代の物語であるが、『恋する女たち』は第一次大戦前夜の英国およびヨーロッパが舞台になっている。したがって、英国（そしてヨーロッパ）の当時の精神風土が輪切りにされて、切断面が如実に浮び出ている。

第三は主人公たちの経験の違いである。『虹』では主人公アーシュラに限って言えば、彼女とアントンとの経験はじめてのものである。しかし『恋する女たち』ではバッキン、ジュラルドは勿論のこと、その相手であるアーシュラも彼女の妹のグッドルーンもすでに恋愛とは何であるかを経験した大人である。副人物のハーマイオニ・ロデイスにしても、彫刻家レルケにしても、ロンドンのボヘミアンの芸術家やモデルにしても、その意味では小説の冒頭から経験ずみの大人である。そしてアーシュラ（グッドルーンもそうであるが）はマーシユ農園から離れた存在であり、いわば、既存の階級をこえた精神の貴族である。これは『虹』の最後の教章でもそうであったが、この小説では最初から終りまでそうである。英国でもこの世紀の初め頃までには、農園階級にまで、こうした種族が誕生していたらしい。

第四は、後で詳しく述べるから、ここでは簡単に述べて

おく。小説中に働く論理である。『虹』では三代に渡る夫婦の物語がアーシュラの恋の破局で終るが、主人公アーシュラの物語を語る論理は直線的である。つまり成長発展のそれである。一方『恋する女たち』では、論理はさきにのべた兩作の共通のテーマ、即ち生への畏敬を中心にして、生のさまざまのサイクル——いくつもの同心円を描くそれである。このことはいまここで述べれば頁数を費やさねばならないから、ここでは触れておくにとどめたい。

最後に大戦の影響である。それは『虹』にないと言って過言でないだろう。何故なら三代目のアーシュラの恋人アントンは軍人で、ポーア戦争に従軍したり、印度へ赴任したりするからである。ありし日のよき時代の雰囲気がある。しかし『恋する女たち』では、たしかに大戦に関する文章は出てこないが、創造的芸術家であるロレンスの予見力は全篇の底に潜んでいる。文明の崩壊感である。そして苛酷な文明批評である。さらに言えば、主人公達の外部世界に対する態度が前作と異なっている。前作ではマーシユ農園の女たち、特にアーシュラは新しい女として、積極的に外界に出て自己確認を行おうとする。それに比べて『恋する女たち』では、グラント (Dantian Grant) の

指摘するように、主人公達は男も女も外側に死を感じて、
敏感に個人に押しもどされる。そして仮の(あるいは偽りの)
安全な世界に逃げこむ傾向がある。この作品を書いていた
頃、ロレンスはオトリーン・モレル宛の、一九一六年五月
二十四日付の手紙のなかでこう書いている。「人間が心の
奥底まで動揺すると、非現実の世界に現実をみつけます。
現在、私の現実の世界は内部の魂の世界であり、それは私
の書いている作品に反映するのです。外部世界は耐えるた
めだけあります。それは現実ではありません。」

(11)

『虹』と『恋する女たち』の共通のテーマは、さきにも
述べたように生への畏敬である。生の全一性を直感し高揚
することである。そしてその生はあくまで個人の生であ
り、個人の生をよそにして、関心を寄せ敬意を表すべき生
もなければ、仕えるべき生などはない。共通のテーマは大
体こうしたものであるが、『虹』では主人公アーシュラの
新しい女としての成長が重要な問題である。『恋する女た
ち』では、バーキン、アーシュラとジェラルド、グッドル

ーンの二組の男女の結婚が中心テーマとなる。即ち結婚と
いう人間相互の結合、連帯である。ここで一、二のことに
注意しておかねばならない。何故ならば、ロレンスが結婚
——人間の結合を強く主張する心の奥底には、人間の孤独
感が余りにも激しく、しつように潜み、まつわりついてい
るからである。一体にこの現代世界で結婚の純粹な意味な
どを強調する人は、恐らく孤独感に日夜襲われているにち
がいないと、推測しても別段不思議でないだろう。事実、
ロレンスはその当時外部世界に絶望し、それを死と見做し
し、たとえそれが非現実であると言われても、心の内部の
世界にじっと潜伏していて、それこそが現実であると考え
ていた。いかなれば孤独の人であったのだ。

ロレンスは外部世界を死だと考えた。それは文明の崩壊
感覚であり、危機感である。ひとつの文明が崩壊しようと
する。そのなかに住む人々の自我は実は文明によっていま
まで保証されていたのだ。保証がされる。人々は当然のこ
とながら、プラスチックのカプセルにひとりひとりはい
って、この人工的な防禦装置のなかから他のカプセルのな
かの人間と親しみあう。これが今日ディスコ等が集まる青
年たちの安全感であるようだが、ロレンスのような人は、

デイスコの青年と違って、はるかに文明の野蛮人である。彼は外部世界の死を耐えねばならぬと考え、自我のなかで、自我の重圧をひしひしと感じながら孤独をなんとかして破ろうとする。彼は言う。結婚という言葉。彼は、女性関係でいろいろ事情のあった人だが、根は母親ゆずりの禁欲主義者だ。僕は彼をクリスティアン・ヘレティックと考えているが、彼にあっては、結婚の結合とは一人の男と一人の女の結合であった。

ここに僕は注意すべきいまひとつの問題を見る。一人の男と一人の女、これは彼ロレンスにとつて、人間の生の結合の最小単位ではなかっただろうか。最小単位とは、最後のぎりぎりの、これ以上退いては人間の連帯結合の成立し得ない、最小の単位である。ラッセルと語り合つて（作中では、ハーマイオニ・ロデイスの邸宅に——ハーマイオニのモデルはオトリン・モレル夫人といわれるが、およそ現在の人物とかけはなれている——集まる知識人のひとりの著名な社会学者となつているが）ロレンスはあるところまでは同意するが、決定的な点では首をふる。彼は社会科学的思想も政治イデオロギーも信用しない。一方当時フロイドを勉強していた彼は、フロイドには敬意を持つが、メカニカルな学説だと

言つて拒絶する。そのようなロレンスが、宇宙の、世界の、人間的な最小の、最後の単位を一人の男と一人の女の結合だと考えていたとしても無理なからぬことであつたらう。特に生命の暗黒の炎を信じていた彼としては。

その頃ロレンスは「元素的」なものを探求してやまなかつた。文明が崩壊していくとき、そして崩壊の行きつくまで見とどけたいと思つている男にとつて、頼れるものは、たぶん「元素的」なものであつたらう。それで彼は言う。人間の連帯の元素的なものは結婚であると。まことに彼らしい言い分であつた。

このことは、彼のE・ガーネット宛の有名な手紙（一九一四年六月五日）のなかで、小説作法の視点から述べた言葉にも明瞭にうかがえる。これもまた「元素的」なものの探求である。「同一の根本的には変化していない要素の状態、いわば同質異形の状態……たとえばダイヤモンドと石炭とが炭素という同一の純粋な一元素であるように。普通の小説はダイヤモンドの歴史を跡づけるでしよう——しかし私は言います、ダイヤモンドだって！これは炭素だ、と。そして私のダイヤモンドは石炭か煤かもしれませぬが、私の主題は炭素です。」⁽⁹⁾

當時ロレンスにとって、『恋する女たち』という結婚小説はこの炭素の追求の書であったのだ。

さて、『恋する女たち』のなかで、主人公バーキン(あきらかにロレンスの思想的分身であるが)は恋人アーシュラに結婚の秘儀について語る。

「愛についての論議の要点はですね」男はようやくよくそういいながら、やっと自分の意識を現実⁽¹⁰⁾に噛みあわせることができた。「われわれはこの言葉をすっかり俗悪化してしまったために、それを憎んでいるってことですよ。だから、われわれは新しい、よりよい觀念を手に入れるまでは、時効によって無効にしとかなければならぬ、つまり、タブーとして口⁽¹⁰⁾にのぼせちゃならんのです」

そして、
「いいえ、愛はすべてを抱擁するわ」

「センチメンタルな合言葉にすぎません……」

「ふん／＼」女は苦々しげにいった、「古い、死んだ道徳観ね」

「ちがう」と男は続けた、「これは創造の法則なんですよ。人間は預けられているなにかだ。人間は他人

との結縁にわれとわが身を永遠に預けなければならぬ。といって、それはなにも自己を失うということじゃない——むしろ神秘的な均衡と総体において自己を持続することなんだ——それはちょうどひとつの星が他の星とバランスを維持しているようなものです」

ここで、バーキンの言う(即ちロレンスの主張する)「星の均衡」(star-equilibrium)という理念がはっきりと打ち出される。つまり「ぼくの望んでいることは、あなたとの神秘的な結合なのです……一緒に落ちあったり、うろつきまわったりすることじゃないんです——なるほどあなたというのとおりだ——ぼくは平衡が欲しいんだな、孤独な二つの存在の完全なバランスが欲しいんですよ——ちょうど星がおたがいに均衡を保っているようにね」。現在男と女は、相互に混交する存在という太古の原型から分離して、純粋な個として孤立している。したがって、男女は、愛の中に完全に吸収されたり、愛を個人を克えた至上と考えたり、愛を精神的抽象的交わりに化する恋愛態度をとったりするのに反対し、「互いに均衡を保つような、孤立した二つの存在の完全な均衡」を求めべきである、というのだ。⁽¹¹⁾

そしてこの均衡は『アロンの杖』(Aaron's Rod)にも

鶯の比喻で語られているが、⁽¹²⁾ ロレンスが強く主張すればするほど、彼の孤独感は一層深く感じられる。「そうです。どこのつまりは、人間は孤独です。愛の力などでどうしようもありやしません。……しかし、ぼくたちは愛こそすべの根幹だなんて、みずからを欺きたがるんです。そんな馬鹿な話はない。愛はたんに一分枝にすぎません。根は愛以上のものです。一種の赤裸々な孤独、孤立せる自己、これです。そしてこいつは永遠に相会うことも交わることもない。そんなことは不可能なのです。」

パーキンの孤独感、彼がハーマイオニに瑠璃の玉の文鎮で殴打されたあと、邸宅のすぐ近くの小山の茂みに走りこむとき、その描写に見事に表現されている。

だが、ルパート（パーキン）の中には何物かを渴望するものがあつた。彼は灌木や芝草の鬱蒼と蔽い茂つた、濡れた丘辺に来た時、幸福であつた。それらのすべてに触れることによつて、飽満してみたいような気持であつた。彼は服を脱ぎ、全裸のまま校草の間に寝そべり、静かに足の花の中で動かしてみた。脚、膝、そして腋の窩まで両腕を、——横になつたまま、腹や胸にもビタリと花を押しあてた。全身に触れる冷

たい、なんともいへぬ感触であつた。感触によつて、なにか身体一ぱいに飽満していくようなものを彼は感じていた。

あまりに柔な感触だつた。高い草の間をわけて、彼はちょうど背丈だけほどの、樅の若木林へ行った。触れるたびに、軟い尖つた小枝が彼をうち、うづくような鋭い痛みを感じさせる。冷い水滴の雨が腹の上に降りそそぎ、柔い針葉が彼の腰のあたりを刺した。チクリと刺すアザミもあつた。だが、痛いというほどではない。彼の動きが猫のように柔かだつたからだ。ねっとりとしたヒアシンスの若芽の上にくるがり、腹這いになり、呼吸のように溫柔な、そしてどんな女の感触よりも美しく、なよやかな濡れた細い草を、手一ぱいにむしつては背にのせ、ほの黒い樅の若木に股を強く押しあて、肩のあたりに榛の枝の管打ちを感じ、銀色の白樺の幹をじつと胸に抱きしめる、その滑かさ、硬さ、そしてその生命を感じさせる節くれ——それこそはえもいわれぬ、たまらない飽満であつた。おのずからにして血の中に流れこんでくる植物の微妙な冷たさ、これほど快い飽満を感じさせてくれるものはない

のだった。⁽¹³⁾

この文章のなんとという生々しい organic なスタイル！
そしてそれは『チャタレイ夫人の恋人』(Lady Chatterley's
Lover)の性描写をはるかに凌ぐ、官能的且つ象徴的な文体
である。孤独を描写するのに、これほどの文章が書けると
いうのは、とりもなおさず、ロレンスにとって孤独という
ものがどれほど親しく、べったりと、濡れるようにまとい
ついていたか、という事実を如実に示している。「星々の
均衡」を言うロレンスも真剣であり、切実であるが、孤独
を描写する彼は、なにか、一種の鬼気を帯びている。どう
やら、ロレンスにとって、孤独は心の奥底の本音らしい。
ここが原点かもしれないようだ。

(三)

当時、ロレンスは両極的思考法をおのれの思想の基本に
置いていた。「ロレンス随想(Ⅱ)『虹』論」でも書いたが、
旅行記『イタリアの薄明』(Twilight in Italy)のなかで、
北方の(英国も含めて)精神による無限追求とイタリアで
みた官能的無限追求を両極に据え、自分たち英国人はイタ

リア人をみていると、彼等を嫉妬し、彼等の傍にいと自
分が青ざめ無意識になっていくような気がする。だがそれ
と同時に、どうもイタリア人が子供であり、自分たちが大
人であるような気がする、と言っている。そしてこの二つ
の両極は究極の無限に至る二つの道であって、ライオンが
決して羊と一緒に寝ることが出来ないように、この二つの
両極を混合してはならない、それは永久に別個のものであ
り、混同は恐怖であり、この二つのものを知ること、全
体を認めるべきである。一つを排除すれば、全体を排除す
ることになる。それら二つのものを混同すると、無に、虚
無になるのだと、断言している。

また『王冠』(The Crown)というエッセイでは、王冠の
下に対峙するライオンとユニコンの比喩を使い、この両者
の対立・闘争こそが王冠を支えていて、両者が仲直りし
て、互いに中性化すれば、王冠は落ちて両者を滅ぼす。ま
た一方が勝てば、やはり王冠は落ちると語る。

この両極的思考——いふなれば dualism 的思考である
が——は、『恋する女たち』では、産業王の嫡子ジェラル
ドに象徴される精神的合理性、即ち「北方の冷たい、氷結
した破壊性」「不思議な、驚歎すべき北方生れの白い悪魔」⁽¹⁴⁾

と、西アフリカ産の女の彫像に表現されている、「数千年にわたる純粹に官能的な、純粹に非精神的な認識」⁽¹⁵⁾のもつ分裂と死となつて、表現されてくる。ジェラルドは産業王の父の跡をついで炭坑を徹底的に機械化し、組織する。いふなれば現代文明のチャンピオンである。一方西アフリカ産の女の彫像は、「胴体は長く優美で、顔は甲虫の顔のごとく圧縮されていて小さく、首にはちょうど環投げ柱のように何段かの円い重い頸飾をつけている」。女の驚くほど洗練された優雅さ、その小さく押し縮められた顔、とうほうもなく長い優美な胴体——「そしてその下のほうは、すらなりとした長い腰からどっしりした臀部が急にせりあがつてみえ、短く醜い脚がその下に突き出している」。つまり、善なること、聖なること、創造と生産的幸福への欲求は全く退歩してしまい、ただ感覚を通して盲目的に進むだけの、理性なき神秘的な知恵の具象である。

そして勿論、ロレンスにとつてこの両者は破壊と死を意味し、相對峙するライオンとユニコンのように、究極の死という王冠を捧げもっているのである。『イタリアの薄明』の王冠は生の王冠であるが、『恋する女たち』のこの王冠は破壊と死のそれである。しかしロレンスは、生への畏敬

の念のなかに、死をまた、破壊をもまた生の（あるいは生に必要な）サイクルの二要素であると見做し、内包するのである。

そして両極はプラス極とマイナス極のように、相牽引し、火花を発する。その火花は、生の究極的な火、ロレンス流に言えば、暗黒の炎となつて現出する。

ロレンスは究極の生を直観し、はやくも『息子と恋人』のポールとクレアラの恋愛の章でそれを文学的表現に描出することに成功している。それはたしかに、まだロレンス哲学とは言えないだろうが、その芽であることに間違いない。「それは彼等一人よりはるかに大きなものであったので、ポールはそれを前にして声を出して言うこともできなかった。二人は合一したのだった。そして二人の出会いの中に、生い茂る草の茎も、タゲリの叫び声も、星々の運行もすべてを包みこんでしまった……そしてそのような夜を過ぎた後は、彼等は情熱というものの大きさを知って、二人とも非常に静かだった……彼等自身が無の存在であることを知り、常に彼等を押流す大きな生命の奔流を知った。彼等は、自分たち自身の心の中に安らぎを見出した。もしそのように偉大な、壮大な力が、彼等を圧倒し、彼等を

それと全く同じものと化し、その結果彼等自身が、すべての草の葉も、木も、生命あるものも、すべてそれぞれの高さに低めて立たせているこの巨大な波のわずかな一粒にすぎないものであることを感知した以上、そうした自分のことについて考え悩むことは何の意味があるのだろうか……そこには一つの確証があつて、それを二人とも分ち持つた……それが生命に対する彼等の信仰とほとんど言つてもよいものであつた。」

ロレンスの兩極論は、二つの生の、そして究極の生のサイクルに必要な要素として内包される二つの死の、兩極論のうえに、一組の男女という兩極論が重層的にかさなつてくる。そしてこの兩極の間に飛ぶ火花は、生命に対する信仰といつてもよいものであり、生命の火といつてもよし、彼流に暗闇の炎といつてもよい。要は生命のパプティズムである。そして一人の男と一人の女は「星々の均衡」のごとく自己の独自性を保ち、他者の異質性を認め、うけいれ、あくまで「孤立した存在の均衡」を創り出すのである。

ロレンスは『恋する女たち』の序文と称する文章で（ロレンスは面白い男だ。小説を書きあげると、序文と称する哲学的随想文のような文章を書きたがる癖があつた。しかもそれらは結

局序文にならず、『息子と恋人』では書簡集に、『恋する女たち』では評論集『フェニックスII』に収録されているが）次のように書いている。「男は胎内の未だ生れ出ない欲求とその充足と戦っている。植物の真中から芽生えようと戦っている。蕾のように、新しく芽生えたものが、彼の内部で苦悶して戦っている。真の個性を持った男はだれも、歩みながら自己の内部に何が起りつつあるか知ろうとし、また理解しようとする。人間の意識を言語によつて表現しようとするこの戦いを芸術において無視すべきではない。この戦いは、人生の大部分を占めるものである。それは一つの理論を二重に焼き付けたものではない。それは意識的人間に变身しようとする情熱的な戦いなのだ。」

この「意識的人間に变身しようとする情熱的な戦い」という言葉によつて、ロレンスの言わんとするところは、無意識の底にある状態から、言語によつて読者にも共鳴され得る、有機的な全一的表現へ達する戦いである。ロレンスは『息子と恋人』を創作する過程で、体得し得た生命に対するほとんど信仰とも言える経験を、文学の小説というジャンルでは『虹』『恋する女たち』によつて、人物造型、描写、表現を達成しなければならず、理論的作業では『精

神分析と無意識』(Psychomalysis and the Unconscious)、『無意識の幻想』(Fantasia of the Unconscious)で理論的につめねばならなかった。もっとも後者二冊の理論的著作は、ロレンスを詳しく知らない一般読者には、その理論作業があまりにロレンス的であるので、理解しがたい書であるだろう。一部には奇書とも噂される書である。

それはともかく、『恋する女たち』のなかの、バーキンがアーシュラと恋を成就するときの描写は、『息子と恋人』の描写の発展線上にあるが、はるかに複雑でしかも円熟している。

女は男の張りきった円い腰をしっかりと抱きかかえている。男が自分の上にかがみこんだとき、女は暗い秘密の神髄に触れる思いがした。これこそ男そのものなのだ。女は坐ったままうけつけたようになっていた。

男も女の上にかがみこみながら、やはり放心しているようだ。それは二人にとって共に完璧な自己放棄であり、同時に存在に到達しようとする最も堪えがたい努力でもあった。それはまた、最も深い生の力の源泉から、すなわち人体の最も暗い、最も深い、最も不可思議な生の源泉から、いわば尾骶骨から迸り出てくる、

圧倒的な歓喜のすばらしき充足感にはかならない。

静かな交流のひとつが過ぎ去る。あの不可思議な暗い豊かな流れがうねるように膨れあがったかと思えるまに、たちまち女の上に襲いかかり、女の全身をひたし、その意識を押し流しながら、脊髄を流れ降り膝をとおって足さきに抜けていった。こうして、あらゆるものを掃蕩しつつ、女をして根源的に生れ変らしめるあの静かな交流のひとつが過ぎた……男はかすかな光を放って女の前にたたずんでいる。その気味の悪いほどの現実感に気おされ、女の心臓はほとんどまるかと思われた。

(四)

『恋する女たち』と『虹』は一見連作のようにみえるが、この二作は独立した別個の小説と見做す方が妥当である。しかし読者がこの二作を読むとき、『虹』『恋する女たち』の順に読む方が理解しやすい。これは偉大な *the Brangwen saga* である。そして両作の共通のテーマは生への畏敬である。しかし『虹』でアーシュラが探求したものは、彼

女が理想と考える型での結婚であり、またその挫折を伴ったが、『恋する女たち』ではパーキンとアーシユラは（パーキンはロレンスの分身であり、ロレンス哲学の予言あるいは説教の、はじめての代弁者である）その洗練された教養と才智と、その自由で、男女の事情をすでに熟知した経験をもって、結婚とは何か、またこのような男女に結婚は可能であるかを、試行的、実験的に吟味する。

そして『虹』の論理がアーシユラに限って言えば、成長発展の直線的なものであったが、この作品では、生への畏敬を中心とした、生のさまざまなサイクル——同心円を描く論理が活動する。中心は周辺に大きな影響を与える。だが周辺の小人物のささいな出来事も中心へ影響を及ぼす。主要人物の関係、パーキンとアーシユラ、ジェラルドとグッドルーン、そして副次的なパーキンとハーマイオニ、ジェラルドとレルケ等の関係、またパーキンとジェラルドの関係は、その他の小人物と円を画くように相関関係をもち、中心テーマに求心的な動きで、集中され、また放散されている。

ところで、『恋する女たち』の最も主要な人物はパーキンとアーシユラである。二人は外界の何を捨てても、結婚

によって連帯結合の結実を望んでいる。しかし、この二人は結婚というものに、まったく不似合いといっているほど、エゴが強く、他者との結合、融合をたやすく行い得るタイプの男女ではない。パーキンは職業は視学官であり、外見すこしひ弱くみえるが、強靱な生命力の持主で、その強烈なエゴは、彼の否定的な世界観、社会観によってますます頑強になっている。彼の文明の崩壊論は彼のエゴから従来あった既存の防禦装置を破壊し、エゴを赤裸々に曝し、したがって、エゴはそれだけ一層自己を激烈に主張すること、おのれの確実性の保証を得ようとする。

彼は人間社会が虚偽にみちていることを知り尽している。現代の機械文明、物質文明がいかに繁栄しても、人間界は「ソドムの林檎であり」「死海の果実」であって、内側は毒汁で腐敗しきっていると、考えている。しかもパーキンは（つまりロレンスは）、現代文明の不毛は腐敗、崩壊の道をたどるが、それを今日改革し、あるいは改良してみようとは、一切望まない。彼は当時流行の社会科学や政治学のイデオロギーを信用していない。崩壊し、死に至るものなら、死なせしめればよいといった、諦観に似た絶望感を持つている。しかも彼は正直なところがある。彼はおのれ

のうちに潜伏する孤独感のいかに深く、身にまといつき、
濕るがごとくあるのを直視し、愛を語ったり愛の抱擁性を
説く言説の欺瞞を告発し、人間の孤独なエゴのいかにしつ
ようであるかを直感している。

パーキンの結婚の理想は世にいわれるような愛の結論で
はない。彼には、愛とは所有、支配の代名詞でしかない。
人々は愛によって男と女が結びつくと言う。そして人と人
が結びつくと言う。しかし、それは欺瞞だと彼は考える。
愛によって自己放棄することは、自分を誤魔化すための虚
偽の口舌にすぎない。人間はもつとエゴイステックであ
り、自分で手に負えないほど孤独なのだ。だから、パーキ
ンが結婚を語るとき、彼の頭にあるのは、男と女が、人と
人が、決して自己を失わずに、「星々が均衡」を保ってい
るように、他者の存在を認め、他者の異質性をうけいれ得
るような、「互いに均衡を保つような、孤立した二つの存
在の完全な均衡」を確立する、という思考である。パーキ
ン自身のもつと分り易い言葉でいえば、「他人と永遠に結
合する義務を受け入れ、相手とともに愛のぎすぎすなに従いつ
つも、しかもたとえ愛し、従っているときでさえも、誇ら
かな個人の孤独を決して喪失しない」結合を求めているの

である。

こうしたパーキンの思想は、多くの人々には矛盾に思え
るだろう。たしかにそうだと見える。しかし哲学思想に矛
盾のなかった思想があったらどうか。むしろ矛盾するが故
に哲学が発見され、矛盾する故にその思想が生身の人間の
思想になってくるのではなからうか。それはともかく、パ
ーキンの（ロレンスの）こうした結婚観はたしかに自己矛盾
に落ちいつている点もあるし、近代精神というものの行き
詰った袋小路に彼がいることを、否応なく示している。

こうしたパーキンは結婚の成就をどのように考えている
のだろうか。勿論それは愛以上のものであるはずだ。「赤
裸の、非個人的な、責任を超越した、僕の究極の姿がある
のです。おなじように、ここには究極のあなたがいる。僕
があなたに出会いたいと思うのは、その場所においてなの
だ——あの感情的な、愛の恋のという次元でじゃない——
そうじゃなくて、それを超えた場所、言葉のない、契約の
ない条件のない領域で会いたいんだ。」

では、その「僕の究極の姿」とは何であるかを一言で言
えば、宇宙的生命と一体になってしまひ得る、生命の光、
暗黒の炎の経験である。これがロレンス哲学の基本かとい

えは、それはたしかに矛盾もしていよう、飛躍もしていよう、しかしながら、パーキンがそう語るとき、彼はいつも試行的、実験的に自己を処し、アーシュラ、ハーマイオニ、ジュラルド、グッドルーンその他の人物からの手きびしい批判を受けて、自己を吟味しているのだ。小説のなかで、その過程をみれば、パーキンにはパーキンの生きる道があるのが、充分理解され得るのである。たとえ、読者の賛否はともかくとしても、なにかパーキンの生きる姿に共感を感じさせる説得力がある。

パーキンは「星々の均衡」の主張を、話題を変え、ひな菊の花を例にしてアーシュラに説明する。彼は菊科の植物は、小さな花が集まってひとつの花を構成している、この花は花として最も高級な花ではないかと、言う。集団をつくって一つの花となっているが、それはひとつひとつの完成した小さな花の集りである。集団をなして結合しているが、個々の小さい花はそれぞれ独立して、自由である。つまり「共にある自由」をつくりあげていると、言うのだ。これは「星々の均衡」と同じ趣旨の主張であるが、さらにそれをこえて、集団と個の連帯にまで発展していく可能性をうちに含んでいる。一組の男女の結合の輪をさらにひろ

げ、人類的な連帯へ向かいたい、作者ロレンスの意志がほのかに見えるのである。

一方、アーシュラ・ブラングウエンは女として、愛の擁護性を信じ、愛の至上主義を持っている。愛はすべてを抱き、すべてを結び合わせるのだと。しかし、パーキンに言わせると、彼女の愛情論はセンチメンタルであると同時に、「大いなる母」としての女性のエゴイズムを巧みに言い換えたにすぎない。女性は「大いなる母」として、万物を自分から生み出すという自信をもっている。それ故に自分のエゴを男性に押しつけ、征服、所有しようとする。それは貪婪な自尊心である。恋愛、結婚、家庭、子供、セックスなどと言いつつ、それを口実にして男性に迫る。セックスひとつりあげても、パーキンはそれを自己目的なものと考えず、性はたんなる契機であり、宇宙的生命の究極的な姿に到達する機会なのであると、考えている。愛に話を戻せば、さきにも引用したごとく、愛は決して根幹ではなく、一分枝にすぎない。その底に、根として赤裸々な孤独、孤立せる自己がいて、愛の次元では、永遠に相合うことも交わることもない。パーキンの結婚観は愛を越えた次元で結合することである。個の自由、個の異質性を相互に認め、

うけいれながら結合する。それが彼の究極の僕であり、究極のあなたなのだ。

ここで、二人は相争い、闘いあう。パーキンとアーシュラは小説の冒頭で互いに好意をいだきあい、引かれあっている。それは読者に素直に納得されている。しかしパーキンはアーシュラのこの女性のエゴを打ち破らねばならぬ。何故ならば、彼はますます彼女に魅せられ、ひかれていからである。彼は、「月夜」(Moon)の章で、月の夜に池に映る月影に幾度か石を投げつけて、その月影を壊そうとする。そして「シビル」とか「シリア・ディー」と叫んでいる。この呼声はいずれも偉大な母を呪う声である。しかし月影は壊されてはもとに戻り、壊されては戻るのだ。彼がこうして「大いなる母」と争っているとき、アーシュラは偶然木陰から見ている。その後、彼と彼女のあいだに口論がもちあがる。彼女は彼が女性に仕えようとしなくて、自分自身だけを欲している、だからあなたは自己中心のだと非難する。これに答えて、パーキンは「僕が望むのは、きみがその強情な意志を捨てることなんだ。その右顧左眊ばかりしている臆病な我執を払い落すことだ」とやりかえず。パーキンもエゴの強い男なら、アーシュラもまたそう

した女なのだ。このような口論は「ドライヴ」(Excuse)でも続く、しかしこのときは、口論の果怒って離れていったアーシュラはふいに思いかえして、花一輪をもってパーキンのところへ戻ってくる。そしてついに二人は接吻をかわし、はじめて融合する。その場面の描写はすでに本稿第三章の末尾に引用されているが、宇宙的生命の炎を感じる二人の究極的な僕とあなたの相合い交わる姿は、『息子と恋人』時代の同じ内容の描写よりは、複雑であるが、しかもはるかに円熟している。そしてそれは、ロレンス哲学が発酵し、蒸溜され得たことを物語っている。

パーキンがアーシュラに出会うまえの恋人はハーマイオニである。この人物は作品中で副次的な存在であるが、F・R・リーヴィスの鋭い指摘によれば、実はパーキンがロレンスの分身であるように、彼女はロレンスの自作自演の戯画である。僕はその指摘を高くかっている。それはそれとして、ハーマイオニは知的で芸術的に洗練された女性である。この女はすべてのものを知性で把握し抽象しなければおさまらず、その結果対象を絶対に支配、所有しなければ安心できないタイプである。ロレンスは決して知的活動を軽視していないし、それどころか、彼が生る究極的

な姿と称する生の全一性に到達するのには、人間の知的活動なくては達し得ないと考えているのであるが、ハーマイオニの知性は偽れる、誤れるインテレクチュアリズムである。

彼女はアーシュラと同じく、エゴが強く、男性になかなか屈服しない女であるが、アーシュラが男性に対して真正面から戦うのと異なり、「男が自分を崇拜し、自分を崇高な存在として認めてくれるならば」、平然と男に従い、男の意をむかえる性格をもっている。アーシュラにいわせれば、これは女の裏切り行為であるが、アーシュラのような農園出身の女性（もつともすでに精神の貴族であるが）と違い、貴族出のハーマイオニの男性に対する態度は洗練され、狡猾である。戦略本部の高級参謀や老練な外交官のもつ知恵を持っている。彼女の対男性態度は、アーシュラのそれよりも、巧みに男性を支配し、翻弄するテクニクを隠しもっている。しかし彼女がバーキンなくては安定感をもてず、充足感ももてないのも、また悲劇的な事実である。彼女はバーキンが堅固な壁に思われてならず、しかも彼なくては自分の存在そのものが危かなると感じている。当然ハーマイオニは、出口を失い、バーキンを瑠璃玉の文

鎮で毆打することで、破滅する。

バーキンはロレンスの分身であるが、こうして彼を眺めてくると、オルダス・ハックスリイがロレンスをモデルにして描いたマーク・ランピオンとは、かなり違った人物であるようだ。

(五)

ここで僕は、さきに述べたように、当時のロレンスが「元素적」なものを追求していたことを、重ねて言わねばならない。バーキンは、普通のリアリズムの小説作法では理解しがたい面もあるが、読者を充分に納得させるだけの力を持つ人物である。そして彼がアーシュラと探求していた、結婚の秘儀は人間の連帯、結合に必要な最小限の、そして最後のこれ以上退ることのできない、「元素的」單位である、一組の男女の結合であった。ここにもう一組の男女がいる。バーキンの親友であるジェラルドとアーシュラの妹グッドルーンである。彼等もバーキン達と同じく、孤独な近代人のエゴの殻にはまり、その重圧をひしひしと感じていて、その殻を破ろうとする人間である。だが彼等

はパーキンたちが究極の生の全一的な姿に畏敬をいただき、それに到達しようとするのと異なり、破壊と死に至る道程を歩かねばならない悲劇的な人物である。特にジェラルドは、いくぶんメロドラマ的な側面もあるが、まったく悲劇的と言ひうる生き方を示す人物である。彼等もまた、ある意味では、ロレンスが熱心に行なった「元素的」なものの探求の、いわば陰画ではないかと思われる。

ジェラルドはパーキンの友人で、産業王の嫡子で、精力的で、すばらしく知性的で、意志力が強く、天才的な企業経営能力を持った青年である。彼は企業経営においては精力的であり、彼の徹底した合理主義は、ロレンス流にいえば、「北方の冷たい、氷結した破壊性」を基軸とした、英國の、そしてヨーロッパの現代の合理主義である。彼の父の産業王はその人生を失敗した。と、炭坑経営に失敗したのではない。彼は立派な経営者であったが、彼のキリスト教的人道主義的博愛精神が企業家としての彼の行動とまともに衝突してしまつたのだ。彼はすぐれた企業家として自分の財産をつくつたが、一方では企業家も労働者も魂において平等であると考え、労働者の面倒を家族のようにみた。最初労働者はこの産業王を崇拜したが、やがて彼

等は、富の平等のないところに魂の平等などあり得ないと気づき、ついに反乱をおこし大ストライキで産業王に返礼した。彼は、外面はともかく、内心深く傷をうけ、終生迷いのなかで悩んだ。ジェラルドは父の炭坑経営を若くして引き受け、経営の合理化と機械化と組織づくりに全精力を傾注し、たちまちのうちに成功する。彼は労働者が彼をなんと見做そうと関係なく、躊躇することなく、能率という觀念を縦横に駆使する。彼は人のみならず、自分の馬や小動物まで、自分の合理的支配に屈せせしめる。このジェラルドの精神状況は、エゴイズムの極にある、孤独な近代経営者の姿態であるが、彼は自信と安定感をもって事を処していく。

しかし彼の心の奥底には深い傷がある。子供のころ弟を誤つて銃で死なしめた挿話が示すように、心の底で深く彼は傷ついている。そして彼の経営が成功するにつれて、時折心の空漠たる風景の向うに、その傷が痛むのに気づく。彼は決して、いわゆる「感情的に幼児のような産業経営者」というタイプではないが、彼がグッドルンと出会う頃には、こうした精神状態になっている。

ところが、ロレンスがジェラルドを主要人物として登場

させたのは、この小説に現実性と広い視野を与え、小説の厚みを増す結果になっている。ジェラルド登場によって、英国の産業界の実体が読者の眼前にひろがる（因みに、ハイオオニもそうした役割を演じている。貴族階層と知識人の当時の精神風土を、読者にみせるのに役立つ）。即ち、この小説がただの結婚小説にとどまらず、英国の、そしてヨーロッパの社会的断層のなかで、男女の愛の実体が如実に描かれる結果となっている。観念小説の域にとどまらず、より現実的な、より広い視野のなかで、パーキンとアーシュラ、ジェラルドとグッドルーンの愛の物語が語られることは、たしかにロレンス文学の系譜からみて、作者の成長を確証している。ロレンスは『息子と恋人』の世界を脱して、ひとりの職業作家、大人の作家となったのである。

ジェラルドとグッドルーンの恋愛は、パーキンのそれとは対照的で、パーキンの忌み嫌う、現代の知識人によくみられる、愛の抱擁、愛による自己放棄、そして愛による結合、融合を信じる、自己脱出型の恋愛である。パーキン流に言えば、それは人間世界の表層に浮ぶものであり、男と女、人と人との結合にならないで、孤立した人間が、自分が孤独なる故に止むなくデッチあげた詭弁にすぎない。そ

れは人々の結合をつくりあげるところか、孤独な人をさらに孤独にし、孤独を打ち破るところか、孤立した各人をその牢獄に閉じこめるだけである。しかしながら、ジェラルドとグッドルーンがこうした恋愛におちいらねばならなかった事情には、それなりの必然性がある。それも茫漠とした情緒的なものではなく、作者ロレンスによって吟味された必然性があったのだ。

たとえば、ジェラルドとグッドルーンが結ばれる夜、彼は父の葬儀（これは彼自身の運命も暗示しているが）のあとの夜、家を抜け出し、父の新しい墓地を訪れ、その泥をつけた靴で原野をさまよい歩き、ブラングウェン家に辿りつき、こっそりとグッドルーンの部屋に忍びこみ、ちょうど幼児が母親から生命を与えられる暖かさ⁽²⁰⁾と乳を受けとるように、彼女を抱擁する。その行為は、日頃の産業界経営者として精力的な切れ者である彼の言動とは似もつかない行為であるが、彼はグッドルーン相手に、自分の心の不思議な裂け目を意識しながら、彼女なくしては自分は生きられないと自虐的に認める。彼は、感情的に幼児のような産業界者ではないが、そうせざるを得ないのである。

グッドルーンはいえ、姉のアーシュラに似て自由な

女であるが、姉よりも華やかで、いつも鮮やかな色彩の服をたくみに着こなす、美しい女性である。彼女は生命力にあふれ、知的で、貴族的な印象を与え、小物の彫刻をよくこなす芸術家である。姉のアーシュラ(二十六歳)が蕾が開こうとする花の風情をいまだに身辺にただよわせているのに、妹のグッドルーン(二十四歳)ははるかに官能的である。そして彼女もまたジェラルドに似て、近代のエゴ病の患者であり、孤独な人物である。

ジェラルドは女性関係ではかなり荒っぽい男である。彼はいろいろな女と知り合い、社交界ではできるだけ目立つように振舞い、しかも女達の関心と好意の的になる。彼にはドン・ジュアンの素質があるが、それも彼の世俗的な潜在能力が示す卓越性のあかしでもある。しかし、グッドルーンとの関係はそうしたものではない。ジェラルドはその頃、成功者としての自尊心と積極的な心の張りのかげに、時折みかける空漠たる風景の向うに、底知れぬ恐怖に近い孤独感を感じている。そしてグッドルーンとの愛にその逃げ道を求める。実際グッドルーンなしには暮せない気持ちになっている。しかしグッドルーンは、ジェラルドを愛しているが、芸術家らしく自分の自由をおびやかされないよう

に努めている。彼女のジェラルドに対する愛にはいろいろな動機があるようである。世俗的なものから彼女の愛の理想論まで。彼等がはじめて接吻したのは炭坑の鉄橋の下である。そこでは坑夫達がよく恋人を自分の胸に押しつけていたのを、グッドルーンは見ている。そしていま「その同じ橋の下で、坑夫達の支配者がその胸に私を抱きしめている」と喜ぶ。こうしたあたり、彼女は大変世俗的な女であるが、また彼女はジェラルドにまけないくらい知的な女であり、しかも彼よりはるかにシニカルで、彼女の女性としての意志力は、広大な社会勢力に対するよりむしろ、個人(21)に対する戦いにより適しているのである。

一方ジェラルドの方は社会的に強力な男であるが、ほんとうに愛した女に対しては、個人的に戦うことはあまり上手でない。遊ぶことには慣れているが、愛することには巧みではない。彼は彼女を支配、所有しようとするのかともうと、逆にただ唯々諾々として自分を棄て、彼女の御機嫌をとり、彼女のエゴイズムに奉仕したりする。対立のまま均衡を保つことは、彼には出来ない。彼は(そして彼女も)愛を至上と考え、愛によって抱擁され、結合させられることを願いながら、一方による他方の所有を互いに繰り返し

ている。彼は彼女をめつたに一人にせず、影のようにつきまとう。それは彼女にとつては嫌な宿命のようなものである。そしてたえず「汝かくあるべし」とか「汝かくあるべからず」とかいった命令を発しつづけているようである。

ときには彼が強いようにみえ、彼女は自分を見失いかける。だが彼女はやりかえず、いずれにしても見果てぬ夢の永遠のシーソゲームのように、彼等のこうした関係はつづく。「相手が存在するためにみずからは滅び、相手が否決されると、今度はこつちが認められるという有様だった。」

そしてこんな恋愛で——即ち戦いで、どうやら、グッドルーンの方に歩があった。ちょうどその頃、彼女は彫刻家レルケと会う。パーキンとアーシュラ、ジェラルドとグッドルーンはアルプスの山宿へ旅する。そして彼等はレルケに会うのだ。レルケは不思議な中年の男である。大体においてパーキンはさきにも言ったように、リアリズムの見方では少々わかりにくい人物だが、それなりに読者に対する説得力をもっている。アーシュラは、『虹』の彼女ほどには生彩をはなつてないにしても魅力的な女性である。ハーマイオニはある意味で戯画だ。ジェラルドは人物造型としてこの小説中最もはつきりしている。グッドルーンは『虹』

ではほんの子供にすぎなかったが、この小説では姉にまさる活気のある、近代的な魅力ある女性である。そしてレルケはこの小説の全体の配置からすれば小人物であるが、いまままで小説家が書いたことのないような、文明の崩壊感覚を持ち、その崩壊ゆえにかえつて生々とする、地下水道に住む人種である。たしかに芸術家としても才能はある。しかも「陥落にもなう極度の感覚の、精妙なスリル」を染しむ能力を持っている。パーキンは下水の鼠だと罵倒するし、アーシュラはむぎになつて、彼の崩壊感覚にたち向かう。ジェラルドはやくもライバルとして彼を意識し、パーキンとともに彼の悪口をならべる。しかしグッドルーンは同じ芸術家でもあり、ジェラルドとの恋愛にいささか嫌気もさしていることもあつて、このレルケに魅せられていく。レルケの芸術観は、これからの芸術は、芸術のための芸術か、産業のリズムに合わせた産業に奉仕する芸術かだらうとする見方である。そして芸術家として馬に乗つた少女の像をつくつたり、工場の裝飾芸術を手がけたりしている。こういう芸術観はパーキンの肯定するものでない。しかし、たとえば馬に乗つた少女の像などは、洗練された作品であるが、しかもその少女の足のなんともいへぬ頼りな

さに、グッドルーンの心は、あたかも催眠術にかけられたように魅せられるのである。その少女の像の足には洗練された、純粹な陥落の感覺があるからなのだ。しかしレルケその人には大きな、なにかの欠落がある。女性の話で、彼はなにげなく告白する、「十六、十七、十八歳——そのあとはわたしに用はない」と。生に対する敵対的な、根強い倒錯の效果といえそうな不吉な效果を讀者は受ける。

やがてアルプスの山宿で破局がくる。ジェラルドはグッドルーンがレルケに心を移したと誤解し、彼女の首をしめる。彼は彼女を殺したと錯覚し、雪の峰をスキーで歩き去り、後日凍死体で発見される。その事件のあつた頃、もうジェラルドは女を殺すか、自分が死ぬかという袋小路に迷いこんでいたのだつた。雪山で「完全な冷たさで死滅した、凍りついた知識」の犠牲者として死んでいかねばならないほど、エゴの袋小路にはまりこんでいたのだつた。ここで大切なことはM・スピルカが言及するように、「倒れたとき、彼の魂の中で、何かが壊れるのを彼は意識する——それこそ、肉体的な死に先行する精神的な死の直接的認識であり、作者ロレンスは、これを芸術的表現をもって讀者の前に示したのである」。

一時イタリアへ旅行していたパーキン夫妻はすぐに帰ってきて言う。「あいつは僕を愛すべきだつた」と。それはジェラルドに対しておつて男対男の同志的結合を求めて断わられたことを追想しての言葉である。あなたにジェラルドが必要だったのかしら？ 私にはあなただけで充足なのにと、アーシュラに問われて、パーキンは答える。「きみを得た以上、ほかにだれがいなくても僕は僕の全生涯を生きる。ほかに水入らずの親密さがなくても平気だ。だが、ぼくの全生涯を完璧に、そして真に幸福にするためには、男との永遠な結合もまた必要だつたのだ。別の種類の愛がほしかつたんだ」と。そしてアーシュラからはげしく反撥される。男と女との結合、そのあとにくる男と男との結合——この思想は『虹』恋する女たち即ち *the Brans-wensga* を書いている過程で、ロレンスが把握しはじめてきた思想で、その開花にはそれ以後の作品群をまたねばならない。

(六)

『虹』の論理がアーシュラの成長発展のそれであり、『恋

する女たち』の論理が、生への畏敬を中心としたさまざまなサイクル——同心円の論理であると、すでに説明した。そして中心は円周に影響を与え、円周上の些細な事件も中心に影響を及ぼすと。円の中心と円周は共鳴を起すのだ。しかも中心は一つであっても、円周はいくつもの同心円からなり、したがって種々の共鳴が起り、そして互いにまた共鳴し合う。

こうした小説中の論理は、小説作法として、いわゆる従来のリアリズムをこえて、象徴的手法の必要を生ぜしめる。『恋する女たち』では、象徴的手法がいろいろと使用され、さらに小説全体の大きな構成のなかに、それぞれの象徴的描写が包容され、象徴的手法以上のものになる。だから、ひとつひとつの象徴的描写をつかまえて、あれは何、これは何と、その暗示するものをきめてかかることも大事だが、それ以上に、全体の構成のなかでそれぞれの描写を鑑賞する方が、当を得ているように思われる。即ち中心と円周が相合い、共鳴するからである。

この小説のはじめの方の教室の情景で、アーシュラが子供達に植物を教えているとき、視学官のパーキンがいきなり入ってくる。西側の窓からさしこむ光で、子供達の頭上

は紅々と豊かに輝いている。彼の顔は「火のように輝く」。パーキンと光の洪水といった光景。そしてパーキンが、美しい色をした、それ故にそれぞれの孤立した美しさをもつ、雄花と雌花の間にとび交う花粉を、子供達に色を塗り分けて、教えるようにと忠告を与える会話。それらははやくも、「星々の均衡」という彼の思想を、読者に納得させる前準備を行なっている。また月夜に池の月影に石を投げこむ彼の行動は、彼が「星々の均衡」を確立するために、是非とも壊しておかねばならない、「大いなる母」との格闘を暗示している。

また、ドライヴの章で、パーキンがアーシュラにプレゼントとして、逆になげかえされる寶石、そしてハーマイオニが彼を殴打したときに用いた殺人のための凶器は、堅い、美しい瑠璃玉であったこと。パーキンのお気にいりの、誇り高い雄猫がハーマイオニの巧妙な愛撫に対して背を向ける点描、等々。

象徴的手法の実例は数々あるが、なかでも、ジェラルドの妹ダイアナが、自家所有地の小さい湖で溺死する事件は、全体の構成のなかから必然的に起ってくるが、同時にジェラルドの運命を予告するものとして、すばらしい象徴

的手法の例である。産業王クリッチ家では湖上のパーティを開く。夜になり、イルミネーションが湖上の船にきらめく。多勢の人々の騒ぎ。音楽隊。ジェラルドはグッドルーソンと、バーキンはアーシュラとボートに乗っている。そのとき突然悲鳴が起り、ジェラルドの妹の少女が恋人と湖に落ちたと騒ぎたつ。司会役のジェラルドは救助の指揮をとるが、自分も水にとびこみ、水底を探す。

ジェラルドは自分の所有地の湖であるので、最初はずこし湖の水のこわさを見くびっている。しか潜るにつれ、水底の水の冷たさ、複雑さ、暗さに身の毛もよだつ恐怖を感じる。それはまた、彼の日常の意識のあり方とバラレルになり、混り合う。彼の精神は精力的で、合理的であり、決断力と実行力に満ちている。しかしひとたび湖の水底にもぐったとき、あたかも自己の無意識の底にもぐったかのようになり、戦慄を覚え、恐怖でガタガタ震え出す。そして震えはとまらない。そんなとき彼は、子供時代誤って弟を銃で殺したことなどをふと思ひ出す。しかしやがて落ち着きをとりのどし、岸辺にあがり広い道を皆と一緒に歩いて邸宅の方に向かう。彼は言う、「わかるかな、あの水底に下りるとひどく冷たいんだ、全く、はてしないんだ。ほんとう

に上の方とはひどく違う、はてしないんだ——たくさんの人間が生きているのがどういうわけなのか、何故僕らがこの上のほうにいるのか、不思議なくらいだ」と。

そしてこの事件の結末は象徴的な言葉でしめくくられている。²⁴

水死体の屍体は明けがた近くになってやっと收容された。ダイアナは両腕を若者の首に堅くまきつけて、彼を窒息させていた。

このような効果的な場面が、小説全篇にそうたくさんあるわけではないが、いままでも列挙したのはこの小説の前半の部分からであって、後半でも象徴的手法はますます数多く用いられている。大事なことは、それら象徴的手法が個々ばらばらに使われているのではなく、構成全体のなかに大きく包容されている点である。ロレンスの技法は、世にいう「象徴主義」をこえて、全体のなかでの完結を造り出す域にまで達している。たしかに『恋する女たち』にあっては、技法は発見である。技法を発見するのではない、技法の発見は技法をこえた全体的有機性の発見であった。

ここで一つ二つ蛇足をつけ加えておこう。大した問題ではないかもしれないが、その一つは、ロレンスがバーキン

とアーシュラを書いた動機は理解し易い。パーキンはロレンスの分身であり、ロレンス哲学の予言、あるいは説教のはじめての代弁者であった。だが、ジェラルドとグッドルーン、そしてハーマイオニ、レルケをどうして造型したので、パーキンとアーシュラを浮彫りにする意図があったこととは否めまい。しかしもっと深い動機があったのではないだろうか。これは僕の推測であるが、ロレンスが『古典アメリカ文学論』(Studies in Classic American Literature)で

ポーを論じて、批評したあの気持ではなかっただろうか。ロレンスはポーを真の恋愛物語の作家であると言っている。しかしポーは精神のみを、余りに精神のみを扱いすぎた。ポーはただ愛、愛の熱烈な震動、そして昂められた意識のみを知っていた。だから彼の愛の物語はエーテルのごとく霧散してしまふ。孤独といえは孤独だが、空の空である。そしてその底には、古い意識の崩壊と脱皮に対するポーならではの証言があると。ひょっとすれば、ロレンスは『恋する女たち』で、ジェラルド達を書くとき、そうした、「古いものは亡び崩壊する必要があるから、(誰かが)書かねばならない」のだという、現代の証人としての意図を持

っていたかもしれない。そして彼にとって、死は生のサイクルの一要素であるのだ。崩壊と脱皮、その下から生れ出る新しい意識の循環なのである。

もうひとつ蛇足をつけ加えておこう。兎の挿話などは、この小説の全体のなかの一部として生きているが、それだけとりあげても独立した短篇ないしはスケッチとして通用する。それはともかく、ロレンスが兎のような小動物を描写したり、子供——たとえばジェラルドの妹ウィニフレッドを書く筆致は、リアリズムや象徴的手法といった難しい話を抜きにして、大変すぐれたものである。実際彼のこの方面の才能はもって生れた素質から出てくるもので、余人の容易に真似られるものではない。これは作中の小人物、つまり主要人物や副次的な人物以外の、所々に点在する人物やその集団を描くときにも該当する。『イタリアの薄明』に出てくる、アルプスの宿に群がる放浪者の描写もまたそうである。F・R・リーヴィスもロレンスのこの種の才能を評価しているが、僕もまたこの種の才能ではロレンスの右に出る者は少なからうと考えている。

もしかりに(本当にかりにだが)、ロレンスの文学が読まれなくなり、『息子と恋人』もこの *The Brangwensaga* も

『チャタレイ夫人の恋人』も忘れ去られてしまいう日があるとしても、僕は思う。ロレンスの子供や小動物を書く文章は長く残るであろうと。何故ならばオルダス・ハックスリイが言うように、彼ロレンスはそれらの小さなものの内側に入り、それらのものの独特の声を聴いているからである。

【附記】

この小説の主要人物、副次的人物等のモデル、また主要人物の名前の語源的な研究は、それなりに重要であるが、この随想では省略した。

【註】

(1) 随想(Ⅲ)を書くときあたりに、Graham Hough: *The Dark Sun: A Study of D. H. Lawrence*. London: Duckworth, 1956; F. R. Leavis: *D. H. Lawrence: Novelist*. London: Chatto & Windus, 1955; Mark Spilka: *The Love Ethic of D. H. Lawrence*. Indiana University Press, 1955; Alastair Niven: *D. H. Lawrence: The Novels*. (British Authors) Cambridge University Press, 1978 のほか、阿部知二編『ロレンス研究』(英宝社)・倉持三郎著訳『D・H・ロレンス』(英

国文化振興会・英潮社)の御世話になった。

- (1) D. H. L.: *Autobiographical Sketch (Phoenix II, p. 592)*.
- (2) Alastair Niven: *D. H. Lawrence: The Novels*, pp. 99-100 参照。
- (3) ロレンス随想Ⅱ、一〇頁参照。
- (4) D. H. L.: *The Rainbow (The Phoenix Edition, Heinemann)*, p. 1.
- (5) A. Niven, *op. cit.*, p. 62. Damian Grant, *Women in Love* (倉持三郎著訳『D・H・ロレンス』p. 25).
- (6) ニッソンの指摘で啓発された。この問題については他に Mark Schorer の研究 (Hofman & Moore (ed.) *The Achievement of D. H. Lawrence*, 1953) 44-45頁・4・4・リットンの研究を参考とした。
- (7) Damian Grant, *op. cit.*, p. 34.
- (8) *The Letters of D. H. L.* Edited with an Introduction by A. Huxley. London: Heinemann, 1932, p. 352.
- (9) *Ibid.*, pp. 197-199.
- (10) D. H. L.: *Women in Love (The Phoenix Edition)*, p. 122. 『恋する女たち』の訳文は新潮文庫の福田恒存訳に準拠する。以下この小説よりの引用は出所頁数を略す。

- (11) Mark Spilka: *The Love Ethic of D. H. L.*, p. 126.
- (12) D. H. L.: *Aaron's Rod*, p. 163.
- (13) D. H. L.: *Women in Love*, p. 100. 中野好夫氏の訳文。
- (14) *Ibid.*, pp. 246-247 参照。
- (15) *Ibid.*, p. 245 参照。
- (16) D. H. L.: *Sons and Lovers* (The Phoenix Edition), pp. 353-354.
- (17) D. H. L.: *Phoenix II*, p. 276.
- (18) Mark Spilka. *op. cit.*, p. 5.
- (19) F. R. Leavis: *D. H. L.: Novelist*, p. 177.
- (20) Mark Spilka, *op. cit.*, p. 138.
- (21) *Ibid.*, p. 136.
- (22) F. R. Leavis, *op. cit.*, p. 171.
- (23) Mark Spilka, *op. cit.*, pp. 142-143.
- (24) F. R. Leavis, *op. cit.*, p. 196 参照。
- (25) D. H. L.: *Studies in Classic American Literature* (The Phoenix Edition), p. 61.
- (26) F. R. Leavis, *op. cit.*, pp. 192-193 参照。
- (27) *The Letters of D. H. L.* (Introduction), pp. xxx-xxxi 参照。